

綺麗だなあ…綺麗だなあ…えへへへへへ

キリツ峰山

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

不死人は、疲れた

鎧というのは、たとえ着た状態でそれなりに動けても重い  
剣だつて、盾だつて、ぶんぶん振つて、構えれても重い  
それに、使命も重い

何度も繰り返しても、やっぱり重い

装備は必需品だ、なければすぐ死んでしまう

痛いのは、嫌だ

だから、重い鎧を着る、重い剣と盾を構えて、重い使命を背負つて歩いた

でも、疲れた

少しくらい休憩したつて、いいじゃない

かつてグンダが居た場所に大の字になつて寝転んでみた  
空は、灰色だ

もう見飽きた

## 目 次

### 思いつきな番外編（基本単発）

思いつきな番外編1 もしも飛ばされた世界がこのすば世界では  
なく：F a t e / s t a y n i g h t だつたら？

### 本編

きれいなそら	—
にちぼつ	—
アクセルのまち	—
文化のちがい	—
人ならざるもの	—
おみせと、ダークネス	—
白霊、ジャイアントトード	—
	22
	19
	17
	14
	12
	9
	6
	1

## 思いつきな番外編（基本単発）

思いつきな番外編1 もしも飛ばされた世界がこの  
すば世界ではなく…F a t e / s t a y n i g h t  
だつたら？

「————おおお…？」

空を見上げていたら、いつの間にか寝ていたらしい  
動きたくないなあなんて思つて目を開ければ、視界が真っ白  
しばらくしたら目が慣れて、入つてくるのは綺麗な青空…じやな  
い。夜空。

「……おー。」

綺麗な星々だあ…まるで水面で輝く太陽みたいに…キラキラ、キラ  
キラしてる…

スッと手を伸ばしても、絶対に届かない。でも…なんだか、取  
れそうな気がするんだよなあ…

だつてほら…こんなに身体がふわふわしてゐんだから、きっと空に  
飛んで…あの星も掴めるはずなんだ

…インツ …ガキンツ

「んんん…なんだ、さつきから…」

私が久々に和めてるのに…なんなんだろう、この音…とても甲高く  
て…あんまり聞きたくない音だ

…起きたくないんだけどなあ…いや、起きる必要ないか  
…敵だつたら死ぬだけだし…なら最後の瞬間までこの星々を見たい  
…それにこの…石?に背中を預ける姿勢も楽だし…  
…ああ…綺麗だなあ

ドオンツ!

「……うわあ…」

私がいる場所の向こうに着地したのは…なんだ、あれ…黒いミニ巨  
人みたいなやつだ、巨人ほどでかくはないが…うわあ…羽騎士より

もでかくて…これは、ヤバいやつ  
それに対峙してるのは…女騎士だ、綺麗だなあ…でも私の髪の方が  
ふわふわさらさらしてる、あの髪は…さらさらするするしてそうだ。  
武器は…見えない、見えないが当たつて。闇黒かな。巨人は石みた  
いな武器を持つてる、欲しいなあ…………でもどうせグレートアクスと  
かに変わっちゃんうんだろうな…

「ハアア!!」

『xbig』『ドオオオンツ!!／xbig』

「……ふわあ…」

…なんか、すつごい。アイツらの戦いは異次元だ。…うわつ、空に  
飛んで…叩きつけられてる、いいなあ…ああやつて空にジャンプ出来  
たらいいのに

「——ここが貴様の死地だ。バーサーカー!!」

「オオオオオオツ!!」

おおつ、熱い展開だ

女騎士がバーサーカーって呼ばれた奴の範囲攻撃に入つて刺突し  
て…いや、受け止めてるのか。惜しいな……つん?

「あれは…戦技か…!」

見たことない戦技だ！透明な武器が徐々に現れて…おおつ、何かを  
打ち出してバーサーカーとやらの左上半身を吹っ飛ばして…

これでバーサーカーとやらも…いや、アイツ…第二形態があるみた  
いだ。すごいな…その場で再生、私欲しい。…いややっぱ要らない、  
延々とその場で殺されて…

「……眩しい…なんだ、一体…」

……うだ、星空、変な考察してる暇ないな、星空を…

「……」

あ、ダメなやつだなこ'r——

「ふうん…見直したわ、リン。やるじやない、あなたのアーチャー。い  
いわ、戻りなさいバーサーカー。つまらないことは初めに済まそようと

思つたけど、少し予定が変わつたわ」

「何よ、逃げる気？」

チヤーには興味が湧いたね、だからもう暫く

! ? ! ?  
—

やつとこさ瓦礫を退かせた、もう常  
ていくし大変な目に「バーサーカー」

—つげう!?

星空眺めて現実い、つ

……  
????? なんで同じば所にがつあ

……あの力はあ、つ

……いらないつていあ、つ

……そろそろムカつう、つ

……あ、それはいたい  
い  
い  
つ

……おーとびらをそう、い、つ

……『かたくとがす』つ!!

バゴンツ!!

「ぐうううううつ……!」

いつぱつはたえた……ふきとばされるけど……そのぶんきよりもとれる!

「へえ……変なのがいるとは思つてたけど、貴方もバーサーカーと同じなんだ」

「ぜんぜんにでない!あんなにやばんじやないし!」

「……まあ、いいわ。バーサーカーと似てるなら殺すのも面倒くさそうだし、そんなに強くないしね。いつでも殺せるんだもの、ここでつまんない蹂躪をする必要も無いわね。」

おつ……みのがしてもらえるのか?みぎうでがへんなほうこうにまがつてるからたすかる……!

「……じゃあ、また遊びましょ、お兄ちゃん。バイバイ」

ほつ……よかつた、よかつた。なんはさつたし、あとはおもうぞんぶんきれいなとこを……ん?

「シロウツ!シロウ!しつかり!シロウツ!」

あれは……おんなきしのつれのおとこのこか?ちをはいてるのか?……あのおんなきしはバーサーカーとてきたいしてたし、てきのてきはみかたりろんでいこう、うん。

「……えつと、だいじようぶか?」

「ツ!近寄るな!」

めちやめちやけいかいされてる……かんがえてみればそうか、ムラサキがよつてきてもけいかいするよな。

「さて、べつにたたかうきがあるわけじや……かいふく!かいふくせれるぞ!しんこーがちよつとだけある!」

こういうときはりょうてたいまつ、わたしをうらぎつたムラサキがやつてた

「はつ……変な真似をしたら、即座に斬るぞ」

「これいじょうしにたくないからへんなことしないぞ」

ひとまずさつさとちかづいて、タリストマンをとりだす。ゆびわもつけかえて…よし、あとはうろおぼえのきせきをよみあげる。

さつ、『ちゅうかいふく』つと。となえおわるとパートとひかりがでてきて…

「どうだ？」

「傷口が塞がっている…それは再生の魔術なのか？」

「きせきだ！」

「…詳しいことは後に。一先ずシロウを安全な場所に…！リン！リン

は無事ですか！」

「私は無事よ！それよりシロウは——」

向こうで難しい話してる…いやつ、どうせわかんないし。おそらく

みよ

「……えへへえ、きれいだなあ…」

## 本編

### きれいなそら

「————おおお……？」

空を見上げていたら、いつの間にか寝ていたらしい動きたくないなんあなんて思つて目を開ければ、視界が真っ白しばらくしたら目が慣れて、入つてくるのは綺麗な青空

「……おく……」

生まれて初めて見た、青空

ふわふわどこからかやつてきた白い雲が太陽を遮り、飽きたとも言わんばかりにまたどこかへと跳んで行く

太陽はサンサンとこちらを照り付け続けるけれど、不快な暑さはない

ひらひらと、どこからか白い蝶々が飛んできた

花を探していたのだろうか？何を思つたか私の兜の先端に止まつてしまつた

スリットの隙間から、蝶々と目が合つた気がする

「……私は甘くないぞ！」

私が言えば、蝶々は飛び去つて行つた

私が甘くないと気付いたからかだろうか？

ふと辺りを嗅げば、焦げ臭い臭いや灰の臭い、血の臭いではなく花や植物の匂いがした

目一杯息を吸えば抜けていた身体の力がさらによける息を吐き出すと、これまた更に身体の力は抜ける

「……まるで底の空いた瓶だあ」

はふう、と息を着けば兜の中には自分の血の臭いではなく和らい匂いがした

「……きれいなそらだなあ……」

「いや、なんだこいつ……」

「んん…？」

頭上で声がした

ゆつくりこちらに目を向ければ、なんとも禍々しい装備をして大剣を担いだ騎士がいた

「…おおく、貴公。珍しい装備と大剣だなあ。ところで、空を見給え。あそここの雲、なにに見える？私はどうしてもあれが結晶トカゲに見えるのだよ」

「お、おう…いや、それよりも何故逃げない。」

「動きたくないからに決まっているだろう…？こうして横になつてみろ…」

「…」うか？

なんだ、中々ノリがいいな、この騎士

「そう…そのまま目を閉じて、息を目一杯吸う」

「…すううう…」

騎士は頭を押えながら息を吸つた

「そしたら、溜め込んだものを吐き出すのだ」

「はああ…」

そうしてどこか重い息が吐き出された

それが吐き出されたのなら、今はきっと軽いはずだ

「…どうだね？」

「…樂になつた、氣はするな。動きたくなくなるほどではないが…リラックスというのも大事だな。俺はもう行こう。それと、この森には危険なモンスターがいる。日没前に帰ることを勧めるぞ。…ではな」

「…おおく、働き熱心だなあ。また会おうではないか？」

そうして働き熱心な騎士は馬に跨り、どこかへ行つてしまつた

…そうかあ、ここも、モンスターがいるのか…

「まあ、いいかあ…もう少し、こうしていよう…」

私の身体に止まつた色彩豊かな鳥を驚かせないようにしながら、私はまた空を見た

ああ、綺麗だなあ…

[.....><<<<<.....]

にちばつ

「んつ…んく…」

撓つたさに目が覚めた

重い瞼を開けらば、風に乗つてパサパサと忙しなく私の髪が動いているのが見える

風が止めばひらりと私の顔に落ちてくる

ふわふわとした髪が私の鼻を撫でると途端にくすぐつたくなる  
なるほど、犯人はここにいたようだ

「まあ、切らないのだがな〜…」

何せ私の小さな自慢なのだ。

兜に守られていたおがけでずつとふわふわのまま…あれ？ そういう  
えば兜はなんで外したんだつたか…

「ん…あつた」

少し視線を横にすれば…ああ、転がつていった騎士の兜が見える  
重くても私が目覚めた時から一緒にいるから、ちょっと愛着がある  
重い身体をゆっくり起こして兜を拾い上げて小さく謝罪しながら

装着

うん、首が辛い

「…にちばつか…」

私の目の前で綺麗な陽が沈んでいく

優しい色を放ちながら、ゆっくり、ゆっくり

「…たいようばんざい ！」

太陽の戦士たちの太陽贊美

私も一時期太陽戦士として協力をしていた  
まあでも、ほとんど役に立つてなかつたかもしれないが…  
まあでも、だからこのポーズには思い入れがある  
陽を眺めていたらちよつとやる気がでてきた

「つよし、行こう」

まずはこの森から出よう。こつちは崖だから後ろに

「グルルルルル」

「……やるきなくなってきた」

ガキンツ！

「つひ…」

突如現れた大きな牙を持つ獣

私はそれに対し手も足も出ない

大きな牙は盾を搔い潜り私にダメージを与えてくるため、パリイレベルの難度で的確に防がなくてはならない

そのくせ足が異様に速く、体感で犬以上の速さだ  
ほら、こんなに速く飛んで

「つぎあつ…！」

手甲を貫いて盾を持っていた腕に牙を突き立てられた

獣はそのまま私を引きずり倒し、突き立てた牙をこれでもかと動かし回す

「いだつアアアアアッ?!?!

いたい、とてもいたい

銀騎士や犬でさえそれほど苦しまず急所を狙つて殺してくれたのに対し、こつちは完全に此方を甚振つている

ぶちぶちと嫌な音がする左手を諦め右手の大短刀を突き立てようとしてもヤツは素早くそれを避けていつてしまふ

「い、つあ、あ、つ…!!」

寧ろ牙が暴れて痛む始末、私の筋力じやヤツにていこうもできない  
むりだ、つんだ

「あ、あ、…」

そつとめをとじた

神域

「……、は…」

死んだと思えば全く知らないばしょにいた

「ここはどこかとあたりを見まわすと…おお！」

「かがり火だ！」

ひくいしかいでそれに近よれば、普段より大きくかんじるかがり火があつた

「安心した…」

と、それにさつさと火をともす

BONFIRE LIT

…ふう

「てんそなはどこがあるかだな…」

と、見てみれば、あの森と…アクセル？なる町へ行けるらしい  
「しん天地！ロスリックのこうへきもこんなかんじだつたな！」

さつそくこへ行こう！

かがり火に手をかざして行きたいばしょ…アクセルをねんじれば、  
わたしのしかいにきりのような物がさえぎり…

## アクセルのまち

アクセルの大通り

「おお…」

きりがはれると、見えたのは大とおりと大りようのキレイなたて物、だが：

「人がいないな…」

なぜか人つ子ひとり見当たらぬ。

何度か叫んで見てはいるものの、それにこたえる人もいないようだまち並みのように、キレイさっぱりと人が消えたようにもようだ

「ううむ…一回でてみるか…？」

それしかない氣もする

でも例の獣に会いたくないし…

いや、正門辺りで確認するだけでいいか：

人がいればいいな。

アクセル正門

「……ん？」

ちょうどまちの正門が見えるところまでついたころだ

ふと目を上げると空に浮かぶみずうみが見えた

みずうみは重力にひかれて、じ面へらつ下していく

「おおお」

ドドオオン

みずうみは地面におちたトマトのようにはれつして、周りに水をまきちらす

正門が壊れているのがここからでも見える

水のいきおいは門をこわすだけでは止まらず、家をはかいしまくつていた。

ただここまでけつこうきよ離があつた。私のところまで来たこ

ろにはスネまでもあるいきおいが強めの波になつていた

[二〇一九]

足をとられてしまつた、ステンと転ぶとよろいの中に水がはいつてくる

水あひなんて、ここ数百年はできなかつた  
も忘れるくらいに気持ちがいい

あつい日差しにやかれたよろいか冷えていくのを感じる  
…そうだ！

「そうびをかえればいいんだ！」

思い立つたかなんとやら すぐに下着もろともよろいを防具にへん  
かんしてめいいつぱい水をあびる

全身が冷えていつてとつても気持ちがいい

あるていどしたら水はきえていつた、それにあわせて私も…よろい  
はきたくなかったから古めかしい平服を着ることにした。

髪から水がしたたつているナゾ気にしない

「それにしても…なんだつたんだろう？」

そういえば、なんであんな水がきたんだろう？

サカナも居なかつたし、くさくもなかつた。じやあどこからやつてきたんだろう？

「んー…うーん…」

…………わからぬ！おわり！

目の前の大さん事を見て、いるとどうでもよくなつてきた

自然の力を思い知らされる。

人間がし行きくごし作つた家やまち並みは自然にとつて目にかけ  
るほどのものでもない…とでも言うように、キレイにはかいされた  
一しゆの芸じゅつとも言えるかもしけない。ちよつと切ない気持  
ちが入り交じりつう、自然へちよつとい怖のねんを抱いた。

## 文化のちがい

アクセルのギルド

— むう……

よくわからないままそうびをきた人の波にのつてやつてきたたてもの、そこでカウンターの女とわたしは困りはてていた。

ボントニーカー

[REDACTED]

……ダメなようだ。

はて、どうしたものか。

まれりの人たちももの珍しそうにみてくるだけだし どうしようも  
ない気がする。

À Á Â Ã Ä Å Ë Ì Ò Í Ò !

うん？ なんだ？

さけび声がきこえた方向をみると、こちらに青いかみの女がはしつけてきていた。

おのちの手に

仕方ない、まわりの人に当たらないようまずはローリングでよこへにげて攻げきをよける

あい変わらずなんと言つてるかわからん。

ておひこ。

「さて、おち着いてくれ。わたしは別にてき対しようというわけじゃない。」

こんなところでたたかいたくない、さっさとロングソードとたてを

なげ捨ててからぼうぐを全てぬいでりよう手をあげる。

すると青かみはキヨトン、とした顔をすると

「？あなた、なんでラテン語なんて喋つてるのよ。」

「おお！ はなし가つうじる人だ！」

すごいぞ！ てき樹状といからふ

とにかくしげきしないように…

「ラテンバ」？ わからないが…とにかく、わたしはたたかいたくないんだ。」

「まあでも関係ないわ！アンデツドが存在感も抑えずに私の前に現れるなんて上等じゃない！」

「だから……やめてくれたたかいたくないそれにたしかに不死人た  
が人にわるさは…………わるさは…………あんまりしてない。」

うん、してない。しないはずだ。うん。

— ! ! ! ! ! ! ! !

! 9

すると青かみのうしろから若い男が表れて青かみを止めはじめた  
そしてしばらく口ろんした末に青かみが泣いて逃げていったが

卷之三

「…………あり、ごめん……」「さがわからぬ、んだ……」

卷之三

卷之三

ふと  
あし元にメツセーシがあるのに復かついた

——なんてこった

ああ、べつの世界のわたしもこうなつてるのか…

「ねえ、君。」

「おお、またわたしと言ばをがわせるひどが……」

「うん、そのことなんだけれど。ちょっと来てくれない？」

と、その…白いかみの女の子はわたしの手をとつて有無をいわせず

れん行していく

ギルドの外へでて、すこしとおりをとおつて、うらろじへ  
そうしてクルリと振りかえつて、わたしに向ひなおつた  
「さてと…まず何から聞こうかな」  
…ながい話になりそうだ

## 人ならざるもの

女神エリスは目の前の異物を見つめていた。

路地裏へ呼び出した人の皮を被つたそれは、控えめに言つて危険極まりない。

戦闘能力という面では怖くない。

レベル5から10くらいの冒険者くらいの力しかないだろう。冒険者であれば余裕で勝てるはずだ。

しかし：問題はその中身だ。

女神エリスでも理解できない、まるで闇のような先の見通せない可能性の塊、そして滅びないドッペルゲンガー。

この中身が爆発すれば、それはとてつもない脅威となってしまう。  
：いいや、とてつもないなんてものじゃない。それこそ今の自分には予測すらできない脅威だ。

枷も勿論ついているようだが、最早それは錆付き壊れ、意味を為していらない。

であれば、これをどうにかして止めなければならない。そのためには：

### アクセルの街

「いやあたすかつたぞクリス！おかげで言葉がつうじた！」

「別にいいよ、困っている人がいるんだから助けてあげないとね？」

とつ如あらわれたこの盗ぞくクリス、彼女によつてわたしは助けられた！

というのも、彼女がわたしのあたまにふれると、手が光り、とたんにこの世界の言葉がわかるようになつたのだ！

それとこの世界についてのこともおしえてもらえたし、わたしには必ようらしい冒けん者どうろくもクリスが手伝つてくれてスムーズ

に行えた。

わたしは「何かでかえす」といつたが「お願ひを聞いてくれるだけでいいよ」とかえしてくれた。せい人だな！

「さて、と。登録を済ませたわけだけど……君、この後はどうするの？」  
ん？ んーーー…

「……予定はないな。てき当にクエストとやらにでも行つてみようと思つてたが…」

「そうなの？ でもいきなりはまずいんじやない？ そうだ！ 宿の日処はたつてるの？」

「ん？ ああ…わたしはねないからな…」

「まあまあ、身体が休まる場所はあるだけ得だよ？」

「むう、それもそうか…でもお金が無いぞ？」

「だつたら私と、私の仲間の子が泊まつている宿に一緒に泊まろうよ！ 私たちとパーテイーを組むつてことで！」

「いいのか？ なら…うん。 そうしよう」

うん、クリスはせい人だな。見ずしらずのわたしにここまでしてくれるなんて…！

「じゃあ早速宿に行こつか！ 仲間の子との顔合わせも兼ねてね！」

「そうだな。クエストに行くのはそのあとにしよう」

どうにか少し無理矢理ながら彼女を自分の目が届く範囲に留めることが出来た。

後は無理なクエストを受けさせず、そして中身に暖かい火を注ぎ、  
記憶冷めきつたそれを温めてあげれば爆発は避けられるはずだ。

「……どうか、貴方に寄る辺がありますように」  
「？クリス、なにかいつたか？」

「んー？ 何も言つてないよ？」

# おみせと、ダークネス

アクセルの商店街

「クリス、あの武器すごいかたちだぞ」

「あーもう！立ち止まつちやダメだよ！ほら通行の邪魔になつてる！」

とはいっても、色々なものに目がいつてしまふから止まつてしまふ右を見ればみたことのないしょくぶつや食べもの、どうぶつ。

左を見れば不思ぎなのみもの？や武器、よろい。

わたしはそうびはしないが、あつめるのはだいすきなんだ。

「…かつちやだめか？」

「ダメ。私だつてそれなりに裕福だけど、無駄遣いはしたくないもの」

「もう……」

……ほしいなあ…

この子と一緒に居てわかつたことは幾つかある。

まず精神。外見よりもより幼く、本能的な性格をしている。

外見はそれこそ…14歳くらい？だけれど、欲しいものがあれば欲しいと言うし、それを買えないかしつこく聞いてくる。

可愛げがあるのはいいけど、それとこれとは別。さすがに私もあんな大量に買えない。

同時に好奇心もあるみたいだつた。見たことがないポーションやモンスターの素材があればどんな効果があるのか私に聞いてきたりする。まあ説明を理解している様子はなかつたけど…

そう、理力。理力はそれほど高くない…というか、考えているのか不思議なくらいだつた。私の説明が難しすぎるのかもしれないけれど、それでもやっぱり子供っぽさがある。

「クリス、あの武器はなんだ？」

「うん？あれは…確かに変形武器っていう名前だつたかな。あの変形武器は普段は普通の剣なんだけれど、ハンマーみたいな鞘に収めて固定すると長柄のハンマーになるんだよ。最近王都にきた人が王都の鍛冶屋に伝えて、そこから広まつたらしいよ？」

「……」

「えーっと、あれは形が変わる武器なんだ。今持つてるロングソードから、おつきな槌になるの。」

「…なるほど。あれはちよくけんから…何になるんだろう？」

「…今度からここを通らないようにしよう。」

「…クリス、ここの人々はみんな普つうの人なのか？」

「そうだよ。普通の人達。」

「あのあたまにケモノの耳が生えている人は？」

「あれは獣人っていう種族だね。亜人族って区別されるけれどあれも人に入るよ。」

「アジン…つていうのはどういういみなんだ？」

次々と飛んでくる質問の多くはこういうものばっかりだつた。

他にも「この世界に不死は無いのか」とか、「神々はどんなのがいるんだ」とか「他にどんな種族がいるんだ」とか、「モンスターってなんだ」とか…思いついたことをとにかく聞いてくる、コミュニケーションをとればとるほど好奇心旺盛な子供だという印象が強くなつていつた。

…そういうえば。

「ねえ、お腹は空いてない？屋台で買うけど」

「ん？おなか、おなかかあ…すかないなあ…」

「空かない？」

「この体になつてからかんじたことはないなあ

「ふうん…眠くなつたりは？」

「それもしないな…」

「じゃあ…寒くなつたり、暑くなつたりとかは？」

「…かがり火に寄るとあつたくなるな。それとさむさはきょくたんなものじやないとかんじないなあ…殴られたところがこおつて焦つ

たなあ…」

…これはどう解釈すべきかな。代謝が止まってる？いや、それにしても…

…まあ、夜になれば私が調べることになるし、今は置いておこう。

「そろそろ着くよ！」

「む…もうか。亜人についてもつと知りたかったんだけれどな…」

「アハハ、また話してあげるよ。さ、まずは私のパーティーメンバーと顔合わせをしよう」

## アクセルの宿屋

「ダクネスー！ 戻ったよ！」

「ダークネス？」

なんだそのぶつそうな名前は…

クリスのうしろから部やをのぞくと「お、クリス。戻ったのか」という声。

「ん？ その娘は誰だ？」

「そうだつた、この子は今日から一緒にパーティーを組む——

「——アシユ<sup>灰</sup>つて言うんだ！」

「(すゞ)いきん肉とふくだ!!」

# 白霊、ジャイアントトード

アクセルのギルド

「むむう…」

ギルドにつくなり、私はまたも「こ」でうなつっていた。

…なんだか、メッセージがふえてるんだ。

『この先、カエルがあるぞ そして、デブ！』

『いい奴！』

『お前もそななるだろう…つまり、俺はやつたんだ！』

「…ん？」

「どうした？アシユ。」

はねるかんきをするげんえいをみていると、ダクネスから声がかかつた。そうそう、この人の名前はダークネスではなくダクネスだったようだ、笑つてゆるしてもらえてよかつた：

「メッセージを見てた。」

「メッセージ？」

「足元にいっぱいある。」

「…なんの事だ？」

「あーー！えーっと、ダクネス、これはあの子のスキルみたいなもので…」

メッセージを見ると…なんだ、みんなカエルとかデブとかいつてる。

それになんだかよゆーそうだ。だれも心が折れてない。

…もしかしたら

「…クリス、カエルにかんれんするクエストつてあるのか？」

「え？それならこれから受けるクエストだけど…」

「私ひとりで行つてみても」

「ダメ。」

「…どうしても？」

「ダメ。」

…なんか、圧がすごい。初見のときははじめてみた王たちの化しんみたいだ。

「むう…………お、じゃあなかまはダメか?」

「え? ううん…まあそれならいいけど…」

「そうか! ジャあまつてくれ!」

「ちよ、ちよつと! …行つちゃつた。」

危ない危ない。

あの目は絶対にやらかす目だった、一瞬行かせても大丈夫かなって思つたけど。

ぜつつつたいに行かせてたらこの世界が危なかつたよ…  
…あの子が言うメッセージ、あれは私も一応見ることは出来る、朧氣だけど。多分他の神様、たとえば…可能性に纏わる神様ならもつと見れるのかも知れないけど。

でもあの子は気付いていないんだ、ここの人達は心が折れてないだけで、死んでないとは限らないって。メッセージの余裕そうな雰囲気に乗せられて、できるかもと信じて、それで何度も死んでしまつたら…

「クリス、大丈夫かー?」

「ツハ、だ、大丈夫だよダクネス!」

…そういえば仲間つて一体どんな

「クリスー! 連れてきたぞー!」  
⋮

『(停む霊体二名)』

「んぶつふ」

めっちゃ白い人?! いや、あれは…

いやそうじやなくて目立つ目立つ!!

「つき、君達! まずこっちへ行こうか!?」

「え? ク里斯、クエストは」

「いーからこつち！」

と、一度ギルドの外へ三人を連れ出す、これはいけない。

「はあ…まず一人にお願いなんだけど、その白く光るの止められる?」

『可能ですか』

『同じく、可能ですか』

「あ、できるんだね。やつて？」

私がそう言うと途端に二人の姿が普通の人になる。

片方は…なんだろう、少し反った片刃の剣をもつ女の子と、もう一人は大きな半透明の膜みたいなので覆われた剣を持つ女性だ。…腰には刺剣も見える。

「…で、アシユ。」

「な、なんだ？」

「こういう、この世界では特異なものを呼ぶ時は、言う!」

「え、でも言つ」

「これからして、いいね?」

「…はい…」

「ん、じやあ戻ろう。クエストを受けてくるから大人しく待ってるこ

と、いいね」

「はい…」

アクセル平野

「…ダメだ。なんだかうまくふれない…」

へーやについた私たちはさつそくカエルをたおしに…いけず、私はこうして…えーと…か、からすひと?からすじん?…からすびとの大短刀をふつていた。

なんだかおかしいのだ、うまくふれないというか…手になじまないといつか…まるで私のぎりようが落ちたみたいだ。

「仕方ない…ロングソードにしよう……あ、じゅんびはいいぞ。」

『…では、お先に』

『私も行きますね』

と、きょう力しやの2人が先がけていった。

…私も負けてられないな！

「私もいく！」

まずは…2人があっちのカエル2匹にいつたから私はべつの奴…  
あのこりつしてゐる奴をたおそう！

「…あ、でもバックスタブのほうがいいか…」

正面からたたかうのこわいし…あつちは…おお、居合でカエルのは  
らが開いてる、こわ…月光の光はなんてかんつうしてゐるし…：

「そつと、ゆつくり…」

カエルにバレないようゆつくりゆつくりアイツのうしろにま  
わって…近づいて…

「よつとととと…！」

かけ上がつて…！

「そいつ！」

ザクッ！

のう天にロングソードをぶつさす！

…どうだ？

「…よし、たおした！」

さあ、次の

「わふ」

……そういうえば、おもいからかぶとはずしてたな…ハハ

「た、れ、か、た、す、け、て、え、え、え、!!」

あのあとにがわらいのダクネスたちにたすけられた、よかつた…：